

世界不安 惑うマネー

長期金利初のマイナス

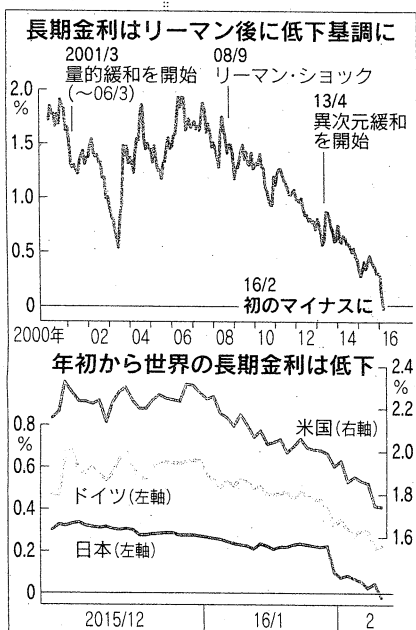
円高進行 日経平均918円安

日本の長期金利が初めてマイナスとなった。9日の東京市場では指標となる新築10年物国債の年利回りが一時、マイナス0・035%まで低下(価格は上昇)した。新興国景気の懸念に加え、欧州で信用不安も浮上。株式を売って国債を買い動きが世界で強まった。円相場は1ドル114円4角前半へ急上昇し、日経平均株価は918円安と今年最大の下げ幅となった。(関連記事2、3、5、9面に)

日銀のマイナス金利は、場の不信が募ったドイツ景気と物価のデコ入れを、銀行は、債券の利払い不狙った「当局」の政策だ。安全を払拭しようと躍起だった。9日、東京で長期ある。米石油開発大手の金利がマイナスとなった。チェサピーク・エナジーのは、世界経済の先行きに対する「市場」からの警戒シグナルである。弱い鎖がどこで切れるのだろうか。そんな不安の連鎖が世界の金融市場を駆け巡っている。

「安全」に殺到 市場の警鐘

「破産申請の計画は、い」と必死に火の粉を払おうとする。おとす。市場では不安心理が、10のは、日銀に眠っているにしてしまっている。銀行の預け金を民間経済に回すためだ。だが、大きな影を落とす。ここへ来て、頼みの米景気も、日銀が銀行からの預け金に手数を減らすマイが広がったままでは、日銀のシナリオは画餅に帰ってきた。米連邦準備理事



9日の東京市場では早朝から海外投資家による日本国債の買い注文が膨らんだ。正午すぎにスイングに次ぎる例目となるマイナス金利をつけ、夕方に

には前日より0・075%低いマイナス0・035%となった。長期金利は住宅ローンや銀行預金など様々な金利の目安。経済成長などの予測を反映するため「経済の体温計」とも呼ばれる。急低下した背景にあるのは世界経済への不安だ。中国景気の減速懸念が強まる中、欧州で金融機関の財務悪化の懸念が拡大。8日の欧米市場では銀行株を中心に株価が大きく下がり、9日の日経平均株価は前日比918円安の1万6008円と1月21日に付けた5円と1月21日に付けた7円に近づいた。安全性の高い資産に逃げ込むように主要国の国債が買われた。長期金利はドイツで0・2%に低下。昨年12月に利上げを始めた米国ですら長期金利は1・7%と1年ぶりの低水準となった。



マイナスとなった長期金利(9日午後、東京都港区の外為どっとコム)

会(FRB)の利上げは、難しさを増している。急な利上げは「米当局がドル高を容認する余裕を失いつつあるのでは」との観測を映している。円高が加速するようならば、日銀はマイナス金利政策を一段と強化し、動いたのに続き、欧州中

国内でも影響は広がっている。みずほ銀行は9日、長期金利の低下を受け、大企業向けの融資金利の指標となる長期プライムレート(最優遇貸出金利)を3面きょうの1・1%から1・0%へ引き下げた。預金金利、住宅ローン金利を下げると、軒並み軟調に推移している。日銀は1月29日にマイナス金利政策の導入を決めたが「必要ならさらに下げる」(黒田東彦総裁)。欧州中央銀行(ECB)は3月の追加緩和を主張、長期金利はさらに下がるとの見方が多い。米国でも追加利上げ観測はしほみ、昨年までのドル高基調は反転し、9日の東京市場では一時1ドル114円21銭と1年3カ月ぶりの円高水準を付けた。

銀行株中心に欧州株安続く
【ロンドン】黄田和宏
9日の欧州株式市場で、銀行の財務悪化への懸念が根強く、銀行株に売りが続いた。ドイツ銀行は買いが先行したが、一時5%安と下げに転じた。

なるか国際協調
なかでも、中国は人民元安を容認しているとみられる一方で、資本流出に伴って1000億がペースで外貨準備が減少している。そのチケハクさが市場の不安心理の根っこにある。中国発の動

揺は、原油など国際商品加緩和に動く。それを追いつけず、マネーの動揺は止まらない。焦点は、中国を含む主要国の協調に絞られてくる。思いついて、中国の資本流出規制を含む危機防止の枠組みで、一定の合意に踏み出せるかどうか。今月下旬に上海で開く20カ国・地域(G20)財務相・中央銀行総裁会議が中心になる。失望が大きいければ、市場の動揺もまた一段と大きくなる。直すほかない。

は、ドイツの株価指数DAXが一時2%強下げるなど、軒並み軟調に推移している。銀行の財務悪化への懸念が根強く、銀行株に売りが続いた。ドイツ銀行は買いが先行したが、一時5%安と下げに転じた。